平成３１年１月８日（火）　全校集会　校長講話

明けましておめでとうございます。１７日間の冬休みが終わり、今日から始まる後期後半を、皆さんと一緒に無事に迎えられたことを嬉しく思います。

私から皆さんに出した冬休み中の課題、「未来に残したい田村市のよさを取材する」ことはできましたか？　株式会社電通の皆さんと一緒に行う授業が来週水曜日にありますので、準備をしておいてください。

さて、「１月は行く、２月は逃げる、３月は去る」との喩えがあるように、後期後半の授業日は、３年生が 45 日、１・２年生が 51 日です。今年度において最も短い授業期間でありながら、３年生には、自らの目標や志を実現させるためのプロセスの一つである高校入試があり、９年間の義務教育修了という節目があります。３年生には、中学校卒業という新たなスタートの機会を存分に生かして、次のステージへと踏み出してほしいと思います。また、１・２年生には、今年度の学びの成果と課題を十分に振り返り、次年度に自分がチャレンジすることを明確にしてほしいと思います。

昨年、「無謀だ」という声にさらされても、大谷翔平選手は自分の物差しに従って、投手と打者の二刀流を貫き、アメリカ・メジャーリーグの新人王に輝く活躍をしました。「小さい頃、週２回の練習が楽しみでしょうがなかった。そういう気持ちが続いている。」という彼の言葉が体現するように、大谷選手は損得や世間の見方は気にしません。常識破りの二刀流の提案に興味を持ったから、プロ野球・日本ハムに入ることを決めました。メジャーリーグに移るときは、年俸が上がる時期も名門球団も気にとめることなく、投手と打者、両方の挑戦に最適だと思う球団と時期を選びました。また、昨年、アメリカ・バスケットボール協会（NBA）デビューを果たした渡辺雄太選手は、アメリカの大学に進学する際に前例がないと言われましたが、「行かなきゃ分からない。」と挑みました。さらには、アイスホッケーでアメリカ・１部リーグの大学に初めて進んだ日本選手の一人、三浦優希選手は、「苦しい挑戦こそ喜びも大きい。」と言っています。つまり、この３人に共通することは、「過去の価値観に囚われずにチャレンジする意欲」と、「自分で課題を設定し、どう乗り越えるかを考える姿勢」です。

しかし、近年の調査では、「うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む」という日本の若者は 52.2％で、欧米など６か国の 66％～86％を下回っています。また、「自分自身に満足している」若者も、日本は 45.8％で、他の国より 25 ポイント以上低いという結果が出ています。皆さんはどうですか。

超高齢化・人口減社会、AI（人工知能）時代が本格的に到来する日本においては、前例のない課題が今後待ち受けています。その時大切なのは、先ほど紹介した３人が持っているような「新しい道を切り拓く力」です。さらには、目の前に問題があるのにぼんやりとした不安を抱えるだけで直視しない、直視しても批判するばかりで問題解決策を考えない、考えたふりをしても「自分ごと」としてどうしても解決しなければならないと思って行動する人が圧倒的に足りないとも言われています。NHK のチコちゃんの言葉を借りれば、「ボーっと生きてんじゃねーよ！」と言えるかもしれません。まさに「光陰矢の如し」であろう後期後半も、チコちゃんから「ボーっと生きてんじゃねーよ！」と叱られないように、「チャレンジすること」「解決策を考えて行動に移すこと」を意識してください。この一年が、都路中学校にとって実り多い年になることを期待しています。